

第33回全国研究会 in 奈良

原発事故と住民の生命・健康

1. 東海第二原発水戸地裁判決
2. 311甲狀腺がん子ども訴訟
3. 3.11直後に茨城県内で出産した女性の不安と葛藤
4. 福島放射線被ばく

乾 康代 (茨城)

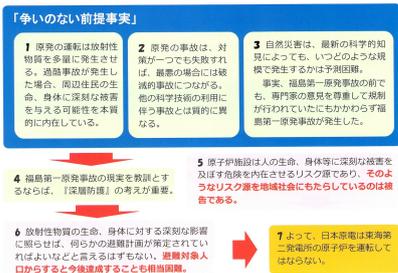
1

東海第二原発水戸地裁判決 (2021.3.18)



2

水戸地裁判決の構造



3



東電ホールディングス「原告らの被ばく線量は、甲狀腺等 福島県専門家会議「多発し 価線量で10ミリシーベルト以下と推定され、被ばくによ っている甲狀腺がんは被ばく り甲狀腺がんが招来されたという関係は認められない」とは関係がない」

UNSCEAR (原子放射線の影響に関する国連科学委員会) 高橋博子「UNSCEARは、原子力を使うことを目的とする組織、被ばくによる健康影響を過小評価する動機がある」の推定値

4

2011年3月4日、茨城県内で出産した女性の葛藤と不安



二〇一二年七月から有識者会、東海第二原発を運転する日本原子力発電 (東電) の茨城事務所 (水戸市) 前で機材を入れている。活動のきっかけは、長男の産後直後に、東日本大震災を体験したからだ。

二〇一一年三月四日、産後の入院で、第三子になる長男を出産した。以前から母乳育児にろう一度挑戦したいと強く思い、準備を進めていたが、一週間後の十一日に震災が起きた。東京電力福島第一原発事故があり、子どもに影響がないか不安だった。つばき市の母乳からセシウムが検出されたことを受けて、つばきよりも福島に近い茨城県に自分の母乳から問題ないかを検出されるのではと思い、母乳育児を続けるが、すこく悩んだ。

産後直後に、放射線汚染に曝されたことが、すこくショックだった。賢いようなことは、二度と起こりたくないという気持ちから、母乳をしながらつばき市で、市内の保育園に通わせる人たちがつばき市、一二年間、茨城運動公園で約三千人以上の集いの集いの町会に参加した。

そのころ、東京の長野県長野で金曜日行われた。水戸でも「賢いから東海第二原発を閉鎖してしまおうから反対しよう」と機材が運び上がり、七月に集った。初回は約三回ほどから集まるまでの三回以上、機会を要めた。

「母親代表で廃炉求める / 原発前で金曜日行動」
東京新聞、2020年4月30日

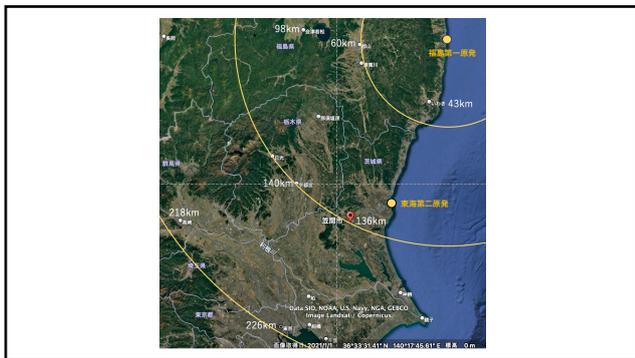
5

陳 述 書
2019 (令和元) 年 月 日
〔住 所〕
〔氏 名〕

私は茨城県水戸市に在住しており、水戸市内の法律事務所まで事務員として勤務しています。3.11東日本大震災当時、私は茨城県内に在住しており、第三子を出産したばかりでした。当時のことを中心に、原発事故時における母親の心証などを陳述したいと思います。

- 1 経歴
- (1) 私は、1977年2月茨城県茨城町で生まれました。父親は動力機械科事務員 (現原子力研究開発機構) に勤務、母親は看護士として働いていました。1980年に藤岡市 (現ひたちなか市) の住宅に引っ越し、高校生まで同所で暮らしていました。
- (2) 母親は収入があり勤務時間が不安定だったため、父親が私を含めた兄弟の面倒をみることも多くなりました。それでも父親の職業で事故などのトラブルがあると帰宅が遅くなることもあり、父は「被ばくをした」と言っていることもあり、そのため、原子力・放射線の危険は最少のころから感じていました。1999年の「CO論争事故」では県内産物の表示が出て、自宅特産するこ

6



7

3/12 15:36 1号機
水素爆発建屋大破

3/14 11:01 3号機
水素爆発建屋大破

3/15 11:25 2号機
格納容器破損

3/15 6:14 4号機
水素爆発建屋大破

セシウム134, 137が大気浮遊粒子状物質 (SPM)
測定器のろ紙に最も多く付着していた時間と濃度

3/17 小学校再開, 長女
通学開始

3/22 次女保育園登園開始

3月下旬 「つくばのお母
さんの母乳からセシウム
検出」ニュース

夏頃 自宅内
0.08~0.15 μ Sv, 家庭菜園
0.2 μ Sv, 雨樋の下
0.3 μ Sv, 国営ひたち海浜
公園1.0 μ Sv超, 警告音

8

震災の翌々日に父親から「東海原発も大変な状況らしい。福島
の事故も心配なので親戚の家に避難してはどうか？」と連絡がありました。術
後の経過はよかったものの、帝王切開手術をしたため身体は本調子ではあり
ません。子どもを抱いて階段を上ることでやっとの状況でした。そんな状態
で、産まれたばかりの長男と上の子二人を連れて、避難などできるわけがな
いと思いました。

産まれて1週間の子どもを連れて外に出ることで大量に被ばくさせてしま
うのではないかと福島第一原発の状況によっては、ここにいた方が被ばくし
てしまうのか？判断材料も少なく、葛藤が続きました。最終的に、父親から
の避難の勧めをのむことはできませんでしたが、今もこの判断で良かったの
か、無理を押しても避難した方がよかったのかわかりません。ただひとつい
えるのはどちらの道を選んでも、子どもを被ばくさせずに、避難することも
その場にいることもできなかった、放射能から逃れることはできなかったと
いうことです。

9

原発事故の不穏情報や余震も多く、落ち着かない日々を過ごしました。そ
んな中でも長男の母乳育児が軌道に乗ってきた3月下旬ごろのことでした。
「つくばのお母さんの母乳からセシウムが検出された」というニュースが目
飛び込んできました。つくばといえば整間からもそう遠くはなく、つくばのお
母さんで検出されるならば、自分の母乳からも間違いなくセシウムが検出され
るだろうと思いました。当時は粉ミルクの放射能汚染も日々報道されていま
した。自分は母乳をこのまま与え続けていいのか？だからといって粉ミルクを
与えることなどできない、子どもに何をあたえればいいのか毎日葛藤しました。
前述のとおり、産前からこれは自分の最後の母乳育児だからと周到に用意し
てきたものですが、その想いは千々に壊れてしまいました。その後は食べ
物に気を付けるなどして、母乳育児を続けてきたのですが、本来ならば安全
で安心であるべきものが、こうして母親にも不安を与えるものになっ
てしまうと、今でも悔しくて、悔しくてたまりません。この大切な時間を
「返してほしい」と思いますもう返ってきません。

10

6 おわりに

今こうして書き出してみると、普段はあまり考えないようにしているのだ、思
い出したくないことなのだとあらためて知らされます。福島原発事故で避難され
た方や命を失った方からみれば取るに足らないことかもしれませんが、やはり大
きな傷になっているように思いつくのは辛い作業です。私と同じように想いを踏
みにじられたお母さん、不安や恐怖を感じていたお母さんはたくさんいると思
います。またその不安は終わったわけではなく、その後ずっと続いています。
本来であれば、JCO臨界事故で気がつかないといけないかったのだと思います。
一度暴走を始めた放射能は人間の力で止めようがない、原発と人間は共存しえ
ないという教訓が生かされませんでした。

11

チェルノブイリ並み被ばくで多発する
福島甲状腺がん

線量過少評価で最大をぼった
UNSCEAR報告

加藤聡子「チェルノブイリ並み初期被ばくにより多
発した福島甲状腺がん」

(結論)

1. 福島の甲状腺がんの発生は、個人線量・地域線量に比例し
て増える。原発事故による放射線被ばくが原因であり、過
剰診断によるものではない。
2. 福島の甲状腺被ばくはUNSCEARの約70倍と推定される。

国と福島県
(事故時)
危険を知らせない
ヨウ素剤を服用させない
被ばくさせるに任せる

(事故後)
被ばく被害を認めない
すべて風評被害とする
(そして)
原発帰帰

12